

い。ところが第2楽章からはギアチェンジし、音楽が急に躍動し始めた。続く第3楽章も含めてメリハリがはっきりしており、複雑な曲の構造が聴き手側にもよく見通せる。最終楽章アダージョは、淡々とスタートするも、曲が熱を帯びていくにつれゆったり目の進行に変わっていき、その流れがいかにも自然。フルート、ヴァイオリン、ヴィオラなど首席奏者のソロも美しく、曲の最後には、完全な静寂の中、1400席の客席と奏者が一体となった至福の時を築き上げた。沼尻はこの曲を指揮するのは初めてという（アフタートークより）。大物マーラー指揮者が1人誕生したかもしれない。（海津修平）

News ヤマハ クラビノーバ「CLP」シリーズ発売

「演奏者の立場に立った開発がいいですね。例えば低音。アコースティックを弾いているときの違和感がないんです。高音はホールで弾いているような響きがします」（塩谷哲）。「いくつもの音をサンプリング、タッチの違いによって指が鍵盤を離れたタイミングで跳ね返ってくる音が違うんです」（ヤマハ株式会社デジタル楽器事業部・尾藤榮里子氏）

ヤマハ株式会社の電子ピアノ「クラビノーバ」に、新たに「CLP」シリーズが誕生、6機種14モデルが4月1日から順次発売されることとなり、それに先立ち、作曲家・ピアニストでプロデューサーの塩谷哲を迎えて発表会が行われた（2月28日・ヤマハ銀座店）。

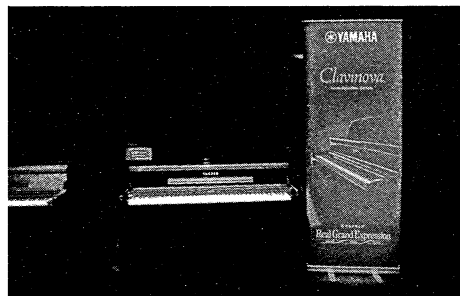
この「CLP」シリーズは、“リアルグランドエクスプレッション”というコンセプトの下、音や鍵盤、ペダルすべてにグランドピアノさながらの表現力を兼ね備えており、USBを用いたオーディオ録音も可能。「弾いていて気分がいいです。これまでは自分の演奏をMIDIで録っていましたが、オーディオで録音できるというのは画期的ですね」と塩谷は話しながら、オリジナルの《憧れのリオ・デ・ジャネイロ》ほかを演奏、「CLP」シリーズの新たな可能性を存分に披露した。

News 日本モーツァルト協会第526回例会&創立55周年祝賀パーティ

創立55周年を迎えた日本モーツァルト協会の第526回例会が開かれた（2月26日・東京文化会館小）。「モーツァルト讃歌」をテーマに、前半は蔵島由貴（p）を迎え



発表会で演奏を披露した作曲家でピアニスト、プロデューサーの塩谷哲（右） ©Yow Kobayashi



ヤマハクラビノーバ「CLP-480PE」 ©Yow Kobayashi

てのショパン「《ドン・ジョヴァンニ》〜〈お手をどうぞ〉による変奏曲」、サラサーテ「《魔笛》の主題による幻想曲」、チャイコフスキー「管弦楽のための組曲第4番《モーツァルティアーナ》」といった、モーツァルトのテーマによる「変奏曲」、後半は植村理葉（vn）、植村理一（va）を迎えての「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲」K364がそれぞれ取り上げられた。オーケストラは井上喜惟指揮ジャパン・シンフォニア。井上の手堅い指揮で、モーツァルトのテーマがポーランド風、スペイン風、ロシア風にと姿を変えていくのを聴くにつけ、どんな色にでも自然に染まるモーツァルトの音楽の普遍性のようなものが感じられた。終演後には同協会創立55周年記念、NPO認証10年新理事長就任を記念したパーティが開かれ（東京文化会館内、フォレストイエユ精養軒）、同協会理事の原山道衛氏ほかの挨拶に続いて、海老澤敏理事長退任後空席だった理事長のポストに、新たに就いた三枝成彰氏が挨拶。「自分は無茶苦茶モーツァルトが好きというわけではないのですが（笑）、モーツァルトが大好きな会員の方々と一緒にその音楽を楽しんでいきたい」。また、次年度のラインナップも発表された。新体制となった同協会、今後の発展を見守りたい。

News モーツァルト、ベートーヴェンで魅せた神谷郁代の至芸

2月20日、ピアニストの神谷郁代が横



日本モーツァルト協会第526回例会より。井上喜惟指揮ジャパン・シンフォニア（2月26日・東京文化会館小） ©長澤直子



日本モーツァルト協会新理事長に就任した三枝成彰氏 ©綿谷由純

須賀芸術劇場でリサイタルを開いた。当初アナウンスされていた前半のプログラム、モーツァルト「ピアノ・ソナタ第8番、同第17番」が、モーツァルト「ロンド」イ短調、《きらきら星変奏曲》、「ピアノ・ソナタ第4番」に変更されたが、いずれの作品も神谷の上品で、作品のフォルムを逸脱することのない様式感のある堅実な演奏。この日の取り上げられた作品は、まさに神谷の美質を最大限に引き出すことのできる、最良のプログラムだったと言えるのではないだろうか。同じ古典派のモーツァルトとベートーヴェン—といっても、ベートーヴェンの第30番のソナタは、ほとんどロマン派の香り漂う作品だが—を、音色やダイナミズムの取り方に変化をもたせ、くっきりと対照的に表現していたのは、ヴェテランならではの至芸と言えよう。聴き応えのあるリサイタルであった。



神谷郁代（2月20日・横須賀芸術劇場）